

関心アリ!

フランス発祥の認知症ケア技法「ユマニチュード」が注目されている。高齢者施設で導入されているほか、教育の場に取り入れられるなど、身近なものになりつつあるようだ。どのようなケアなのか、実践されている現場を訪ねた。

(山田朋代)

コン、コン、コン。東京都品川区のサービス付き高齢者向け住宅「ケアホーム西大井」こうほうえんのリビングで、介護福祉士の沼上久美子さん(37)が、座ってぼんやりとしている入居者男性(94)の目の前のテーブルをゆっくりとノックした。

男性が顔を上げるのを待って、沼上さんは目線を合わせ、耳元で優しく話しかけた。二元气? 何してましたか?。男性はニコニコしながら「今? デートしてた。沼上さんは男性の背中をさすりながら、「いいなあ。奥さん?」楽しかった?」と話を合わせた。男性は難聴で、緑内障で目が見えない。認知機能も低下しており「要介護4」と認定されている。「デート」は男性のユーモアなのか想像なのか分からないが、この施設では、相手を否定せずいったん受け入れることを大切にするユマニチュードを実践してい

認知症患者 否定せずケア

「ユマニチュード」普及進む

る。「もうすぐ昼食の時間ですよ」と沼上さんが知らせると、男性は「ああ、またね」とうなずいた。

同施設長の田中とも江さん(77)は、相手との信頼関係を重視するユマニチュードの考え方に深く共感し、2019年、同施設に取り入れた。「入居当初はどなりつたり暴れたりしていた人も、ユマニチュードによるケアで落ち着いてくる」という。沼上さんも「やりとりが穏やかになり、結果的にケアにかかる時間も減った。『ありがとう。また来てね』と言ってもらえると何よりうれしい」とほほ笑む。

■人手不足対策にも

ユマニチュードは、介護現場の人手不足対策としても注目されている。内科医で日本ユマニチュード学会代表理事の本田美和子さんによると、認知症の人は、なぜ介護をされているのか分からず、ケアを拒絶する傾向があるという。「看護師や介護者が、ケアが拒絶された時に自分を責めて離職につながるケースも多い。ケアをスムーズに受け

入れてもらえれば、介護者の精神的な負担や疲労が大幅に軽減され、離職防止にもつながるのでは」と期待する。

ユマニチュードの技法を、科学の力で分かりやすく伝える取り組みも始まっている。九州大システム情報科学研究院教授(ロボット工学)の倉爪亮さんが開発したのは、拡張現実(AR)を活用した教育システムだ。ゴーグルを着けて人形を相手に体を拭くなどの動作をすると、AR内の人形の表情が変わって、目線の合わせ方が正しいかなどが評価され、声かけが適切かどうか人工知能(AI)が判断してくれる。学生向けの講義などで使われているという。

■小中学生も学ぶ

ユマニチュードの理念を取り入れようとする自治体も出てきた。福岡市は24年度に「ユマニチュード推進部」を設置。全市立小学校の4年生がユマニチュードを学んでおり、昨年度から中学1年生にも広げ

た。同市立今宿小学校で先月行われた講座では、児童たちが

ユマニチュード フランスの体育学の専門家が考案した認知症ケア技法で、「人間らしさを取り戻す、話す、触れる、立つの4つの技術を組み合わせる」という意味の造語。見合わせるこゝろを大切に思っている今年「カンヌ国際映画祭」で女優賞を受賞した映画「急に具合が悪くなる」の題材にもなった。



福岡市内の小学校で行われたユマニチュード講座＝福岡市提供

両手を双眼鏡の形にして目になつたらやってみよう」という声が上がった。校長の遠入哲司さんは「認知症の人と共生するために何ができるか考えることは、外国の人や幼い子にも配慮できるユニバーサルなまちづくりにつながるはずですよ」と意義を話す。